



阿部公彦

18 英文学と事務能力

9月に『事務に踊る人々』（講談社）という本を出した。連載をまとめたものだが、元になったのは勤務先での「英文学と事務能力」という20年以上前の講演である。

英文学周辺にはたしかに事務的な空気が漂っている。T・S・エリオットなどは、さすが銀行で事務をやっていただけあり、エッセイでもキラリと事務の目が光る。形而上派詩人の作品の細部に注目しながら、「ほらね？」とドヤ顔をする。まさに面目躍如だ。だいたい20世紀の批評家でこの手の事務的ドヤ顔と無縁の人がいるだろうか。英米系批評の土台をつくった精読の技法は、事務的感性なくしては成立しない。事務を侮ってはいけないのだ。

しかし、気になることもある。英文学史上には明らかにアンチ事務みたいな人も多い。しかもアンチ事務なのか、事務的なのか、微妙なライン上の人もいる。

たとえば『失楽園』の魔王。一見、明らかにアンチ事務である。神が事務の権

化だとしたら、魔王は事務的失敗に明け暮れたあげく地獄に落ちた存在ではないか。ただ、その粘着的な復讐心や、人間を誘惑するための周到な計画を支えるのは、ある種の緻密な事務能力でもある。

『フランケンシュタイン』の怪物もそうだ。ああ見えて、怪物はけっこう記憶力がよくて、記録作成能力も高い。有能な秘書官になれそうだ。魔王と同じで、フランケンシュタイン博士に対する粘着的な復讐心や、犯行の緻密さを綿密な行動計画が支える。そして魔王、怪物とくれば、つづくのは『嵐が丘』のヒースクリフ。彼にも「事務の人」の顔がある。ロックウッドが明らかに事務能力を欠いているのに対し、ヒースクリフは妄想的で執着的なわりに人材や財産の管理には長けている。

なるほど、アンチ事務と見えるこうした人々に実は事務の魂が浸透しているあたり、英国精神の奥深さを目の当たりにする思いである。 (英文学者)